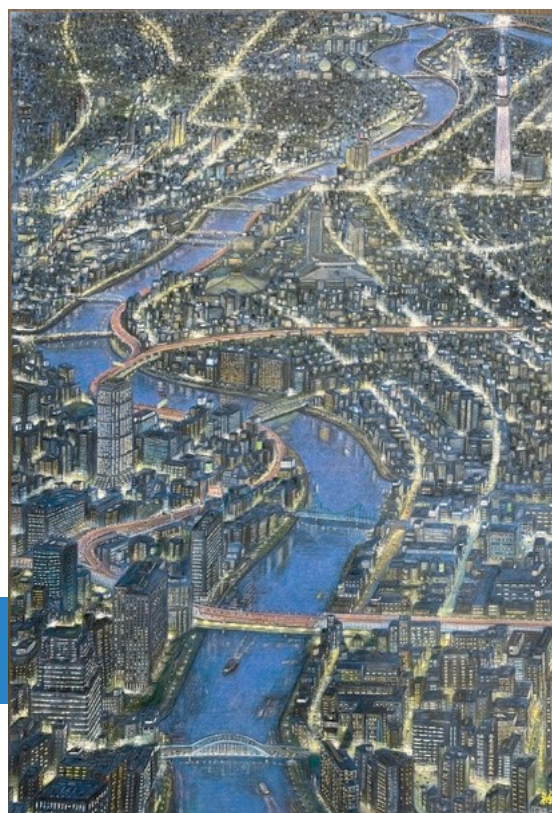


みちのく

成人編

—第45号—



令和6年度 仙台矯正管区

刊行のことば

本誌は、昭和五十六年の創刊号以来毎年刊行し、本号で四十四号を数えております。

当管区では「みちのく書画文芸コンクール」を開催しており、本誌には、同コンクールに応募した、当管区管内刑事施設の受刑者の書画作品及び文芸作品のうち、各分野で御活躍の先生方の審査により入賞した作品を掲載いたしましたので、ご覧ください。

令和七年三月

仙台矯正管区

目次

【文芸部門入賞作品】

作文の部	2
------	---

【選評】 原田勇男 先生

詩の部	17
-----	----

【選評】 原田勇男 先生

短歌の部	24
------	----

【選評】 上林節江 先生

俳句の部	29
------	----

【選評】 赤間 学 先生

川柳の部	34
------	----

【選評】 水戸一志 先生

文芸部門審査総評	39
----------	----

【書画部門入賞作品】

絵画の部	42
------	----

【選評】 枡澤 怜 先生

ポスター・カレンダーの部	47
--------------	----

【選評】 鈴木智枝 先生

毛筆の部	50
------	----

【選評】 鈴木霽月 先生

硬筆の部	55
------	----

【選評】 鈴木霽月 先生

書画部門審査総評	59
----------	----



審査員

宮城県芸術協会会員

日本現代詩人会会員

日本文藝家協会会員

宮城県詩人会顧問

原田 勇男



山頭火の宙そら

宮城刑務所 K・Y

放浪。

この二文字は、ある種の人々には、仰ぐ間に千切れて、空の青に染まる浮き雲のように、淡く、切ない響きをもって聞こえるらしい。

それは憧憬に似て、決して手に触れえないのだけれど、一生に一度でいいから齧かじってみたい、禁断の果実のような物かもしれない。

私の少年時代には、路地や海辺、河岸に、まだ多くの放浪者が居たような気がする。

種田山頭火は、瀬戸内海の小さな町で、大種田家おわたねだけと呼ばれる酒造の名家に生まれた。亦その町は、私の故郷でもある。

山頭火という名前が世間に知られるようになったのは、昭和五十年前後である。

そのころ私は、祖父に山頭火の事を尋ねた事がある。

俳句と短歌が好きだった祖父は、以前から彼の事を知っていた。

「ああ、山頭火な。あの人は『ほいと』じゃ」

と祖父が言った。

「ほいと」とは、中国・四国地方で浮浪者の事を言う。その語感には、一種蔑んだ響きがある。例えば小学生の頃、同級生が酷く汚れた衣服で居ると、「ほいとみたじゃ」と、私達も使っていたくらいだ。

私は祖父のさり気ない言い方に、山頭火の故郷での扱われ方を感じた。その事が、私の山頭火の印象に翳りを与えた。

それから数年後、私は東京で、ある俳句の会に入会した。その折に私は、山頭火の句集と出逢った。故郷が同じという事もあり、親しみを覚えた。注釈がなければ判らないような方言も、そのまま理解できた。彼の句は自

然に私に、馴染んだ。

二十代だった当時の私には、山頭火の句は潔い物に思えた。

焼き捨てて日記の灰のこれだけか

そのころ私が気に入って、よく口にしていた句である。若者にとってある種の厭世観は、麻薬のような快楽を伴う。

二年余りで、私は其の句会に出席しなくなった。元から何事に対しても勤勉な性格ではないから、疎遠となるのは分かっていた。が、それ以上に、集う事や仲間意識を持つ事が、私自身苦手である事に気付いた故だ。その後十年近く、私は俳句と無縁になった。

三十代の後半、妻子の死（交通事故）を契機に、私は日本全国を、ギャングルと酒に浸りながら旅をする様になった。

旅には必ず、古書店の軒先に並ぶ詩集や句集を手にして、出かけた。そして山頭火に再会した。

正直なところ十年前の印象は薄れ、読んでいる内に自分の恥部を代弁されている気がして、嫌悪が背筋を這上った。

酔うてこほろぎと寝ていたよ

一見、情感あふれる粹人の光景が、浮かんでくる。然し、酔って路に寝る行為が、かくも叙情的であるはずがない、私はそう思った。

どうして此処まで、山頭火はその彷徨に衣を着せるのか。これらの句は放浪者の叫びに聞こえるが、このような放浪には作為があるのでは、とさえ疑い反発した。

嫌悪がこうじて、山頭火を調べはじめた。彼の句を愛する人の多さにも驚いたが、それ以上に山頭火の研究者が多いのに、舌を巻いた。然も、めいめいの研究者が想い描く山頭火像が異なっていて、山頭火は百人、いや

千人存在したのでは、と思える程だった。

私が興味を抱いたのは、山頭火の放浪に至る淵源であった。母の自殺、家の没落と、様々な要因が絡んでいるものの、これが決定的な要因だ、と断定できる物はなかった。

然る程に私は、中途半端に山頭火を放り出した。

——あれから十年。

「山頭火の伝記を出版するから、手伝って」

と、以前入会していた俳句の会の恩師から、突如打診があった。私がある出版社で校閲・考証に就いていた事から、その経験を買ってくださったのだ。

「はい。私でよければ」

と言下に引き受けた。その頃の私は、誰かに必要とされる喜びに飢えていた故だ。

然して必要に迫られて、また山頭火の句を読み始めた。往時の山頭火に対する嫌悪感も失せて、自然に句が解るような気がした。

シンプルであった——。

それまで染みのように感じられていた彼の自己中心的な行動は、余計な汚れが取れて、柔順に受け入れられるように成った。

改めて年譜や書簡を読み直してみると、彼が常に、人に己の評価を望んでいた事が判り、実に人間らしいじゃないか、と思えてきた。

恐らく其れは、私の年齢が彼を受け入れる壺の様な物を、身体はどこかに造り出していたからだろうが、同時に、私自身の放埒な生活が、形を変えていた事にもあるだろう。畢竟、山頭火に対してハッキリと他者の立場を取れた事が、彼の放浪という行為を認める事が出来るようになった、要因であろう。

亦そのころ私は、取材旅行先（俗に山頭火巡礼）で、二つの句碑を見た。

一つは、福岡県の糸田町にある伯林寺という、寺の境内にあった。

逢ひたいボタ山が見えだした

もう一つの句碑を見たのは、大分県の中津市であった。

阿なを待つとてまんまるい月の

後者は、句碑があると聞いて訪ねたのだが、前者は全く、偶然の出逢いであった。

この二つの句碑に選ばれた句には、奇遇とも思える共通点がある。

それは山頭火が、いつも誰かに逢いたいと望んでいる事だ。

然様ならば、彼には放浪という意識など、毛頭なかったのではなかろうか。

彼を吟遊する孤高の俳人と定めたのは、寧ろ、彼を溺愛する読み手たちであって、彼は誰かに逢える事を思い描きながら、旅をしていたに過ぎないのではないか。

——私が後者のある中津市を訪れたのは、四月の昼下がりだった。田園の上には、南国特有の積乱雲が流れていた。

私は句碑の前に佇った。

そして、かつて山頭火が仰いだであろう空を見ながら、矩なき旅を続けていた若かりし日を、顧みた——

“なぜ彼の句に己の卑しさを感じたのか”

“なぜ彼ほど反発したのか”

“それが今、なぜ素直に悦びが伝わって来るのだろうか・・・”

“山頭火よ、ごめんな。”

——あれから四年。

山頭火の伝記は、『山頭火の宙』という書名で、出版に漕ぎ着けた。

私は右の編纂の当初、再度、山頭火の放浪の淵源に着目した。なれど彼を掘り下げる程に、放浪の淵源などは然して重要な事ではなく、彼の作品の中にある躍動感こそが、種田山頭火という俳人の生きた証左であり、唯一の生存理由のように思えた。

亦、彼は晩年の日記に、

——轉身一路、ここにのみ、今の私の活路がある、亦しばしば沈静——と記している。

察するに是は、五割が正直な気持ちで、五割は旅を終えようとして顧みると、轉身ばかりだったと述懐し、轉身と沈静という一見相反する物を、腕に留った蜂を静かに見るような心境で、語った気がする。

帰する所、俳人の放浪に限らず、放浪者は何かを求めて彷徨っているのだ。その何かの形が見えない時、彷徨する者の哀しみは際限なく広がる。

彷徨えど出逢えぬ悲劇が、放浪者の悲劇なのだろう。

人間は途方もなく哀しいと、なぜか夏の陽差しのように、明るく笑う事があるという。

山頭火の俳句は、彼の抱え込んだ途方もない哀しみなど忘れて、読んで行く方がいいように思う。

黒染の衣に袈裟をかけ行脚した、山頭火の見た宙の青。それは、現代に生きる私達の胸の隅に、ひっそりと隠れている色彩ではなからうか。

寸評

自由律俳句の代表的な俳人種岡山頭火の生涯を辿ったエッセイ。筆者20代の頃、同じ山口県出身である山頭火の俳句と出会った。放浪俳人の潔さに惹かれたが、筆者の30代後半、身内の不幸から自らも放浪するようになり、山頭火の句に作為を感じて遠ざかった。その10年後、山頭火の伝記出版の編集に関わり、彼の俳句を客観的に読むようになって人間らしい句だと再評価した。自らの生き様と重ねた山頭火論が秀逸である。



「今」を一生懸命生きる

福島刑務所 A・Y

現在・過去・未来、仏教ではこれを三世というそうだが、過ぎ去った自身に執着しながらも、ときに未来への不安を抱えながら「今」と言う時間の中に生きている。というのが現実の人生なのかもしれない。

しかし、「今」という一瞬の時間は、二度と帰って来ないわけで、過去にとらわれていては前に進まない。

そして、起こつてもいない未来をあれこれと心配することは、「今」という時間を無為に過ごすことと同じであり、人生の真実は、「今」という時間の中にしかなく、だからこそ、「今」を一生懸命に生きる。

これは、禅の教えの基本だと何かの本に書いてあった事だが、六十三年の人生を生き、十七回目の受刑生活を送っている「今」その事を身にしみて感じている。

今迄の刑期を合算したら何年になるのだろう。十ヶ月や一年という短期刑も数回あったとはいえ、合算すると三十年近くにはなると思う。三十年といえば有期刑の最長刑期であり、生まれたばかりの赤ん坊が三十歳になる年月でもあって、そう考えると、本当にバカな人生を歩んで来たとしか言えず、「愚の骨頂」とは私のよう愚か者のことを言うのだろう。

その愚の骨頂の最もたるような私のような男にも妻がおり、私が真つかな人間になつてくれることを信じ、帰りを待っていてくれている。

この妻とは、本当に思いもしない事がきっかけで出会い、夫婦となった訳だが、この妻の存在が今の私にとっての心の支えであり、「今」を一生懸命生きようという原動力でもある。

やはり禅語に、一般によく知られている「一期一会」という言葉があるが、「一期」というのは、人間の一生涯のことを意味していて、「一会」というのは、一度きりの出会いだそうで、生きて行く中で、沢山の人と出会い、関わりをもっていく、その数多の出会いの中で、たった一度しか出会

わない人がほとんどではないかと思う。

でも、そんなたった一度の出会いに心を寄せてみる。つまり、「一期一会」に目を向けてみる。それは何故かというと、自分がどういう人間なのか、自分の存在意義はどこにあるのかといった答えは、他者という鏡を通して自分の姿を見ることが出来るからではないかと思う。

禅には、一度の出会いを大切にすることも「一期一会」、いずれ付き合いは終わることも「一期一会」という教えがあるようだが、私もこの六十三年間の人生で本当に沢山の人との出会いがあり、良くも悪くも、その出会いが私の人生を大きく左右してきたことは紛れもない事実だろう。

人それぞれ、性格も違えば、生き様や事象に対する見方、考え方、価値観は違う。

それは、各々が生まれ育った環境にも大きく起因するものではないかと私は思うが、そういった意味で考えると、このような人生を歩んで来たのも、私の生まれ育った環境が色濃く反映してきたのかもしれない。

今こうして刑務所という社会から隔絶された所で生活していても、本当に様々な人が居て、それぞれの人生背景をかい間見るような思いがするが、私がこの様な愚の骨頂としかいえないような人生を送って来たのも、他の受刑者の今ある姿も、そういった自分の意思ではどうにもならない環境で生まれ育って来たことがそれぞれの人生に大きく影響してきたことは否めないと思う。

でも、じゃあ果たして私自身も含めて、刑務所で受刑生活を送っている人達は、自分の生きる道を切り拓こうと一生懸命生きようとしているか、と言ったら私の見る限りではそうは言えないように思う。

それが、はっきり言って今の刑務所における私達受刑者の現実のように思う。

そのような所に三十年もの間、大切な人生を費やして来た訳だが、過ぎ去った過去にとらわれていては何も前に進まないのだから「今」を一生懸命生きたい。と強く思う。

そして、刑務所で生活している現在も正しくその「今」であり、この受刑生活をどうとらえていくかによって社会復帰後の人生は違ってくるものとも思う。

当たり前の事であるこの事を十七回目の受刑生活でやっと本当に分かることができた私は、愚の骨頂の最もたる人間だと自分でも思う。

社会で生活している刑務所とは縁の無い人達からしたら、常識外にしか感じないかもしれないが、そういった目で見られている社会に根を下ろしてやって行くことの難しさがあるというのも社会の現実である。

しかし、人間は社会に居てこそ人間らしい生き方をできるものであり、刑務所での生活は人としての本来の姿ではない。

今、自分の人生を振り返ると、波乱万丈な人生だったと思うが、そういった色々な経験や人との出会いが自分という人間形成に影響して来ただろう。父がヤクザの親分という家庭に生まれ育ち私自身も同じ道を歩むことになり、様々な裏の世界も見て来たし、父他界後は、死を覚悟しなければならぬような経験もし、生きる道を変えざるをえない事になって、四十歳になって初めてカタギの世界で仕事をして、表の世界の事も多少なりとも経験して来たつもりだが、身にしみついた習慣というのは簡単には変えられず、こうして、ズルズルと同じ繰り返しをして堀の中に戻って来るような有り様で今に至っている。

本当に波乱万丈の人生で、語り尽くせない程の様々な事があったが、そういういった人生経験も自分次第で生きて行く上での糧になると思っているし、普通一般の常識とはかけ離れた事の多い家庭で育ち、それが良くも悪くも影響して来たこれ迄の私の人生ではあるが、父や母の背中を見て教えられた事は掛け替えのないものであり、誰がどう思おうと私にとって心から尊敬できる、越えることのできない父、母であることは胸を張って言える。

そして、こんなバカな男が真つ当な人間になってくれることを信じ、帰りを待っていてくれる妻の存在は、残りの人生を一生懸命生きようと思う心の支えであり、感謝の気持ちで一杯である。

後ろを振り返れば後悔する事ばかりだが、過去に捉われていては良い人生は開かれないので、この三十年という歳月を無駄にしないためにも「今」という一瞬を大切に一生懸命生き、これ迄の艱難辛苦を自分の血肉として悔いのない残りの人生にしたいと強く思っている。

そうは言っても自分の思うようにはいかないのが世の中の現実なので、心が折れそうになる時もあるだろうが、一生懸命生きれば、結果がどうあれ、納得のいく人生になると思うので、最後にはそういう晴れやかな気持ちでこれ迄の人生を振り返れるよう「今」を一生懸命生きて行こうと思う。

寸評

63歳で17回目の受刑生活、合計30年の刑務所暮らしという凄まじい人生に衝撃を受けた。父親がヤクザの親分という家庭に生まれ育ち、自分も同じ道を歩んだという。40歳で初めてカタギの仕事に就いたが、身にしみついた習慣に勝てず、堀の中へ戻るという人生だった。しかし、「今」の瞬間を大切にして、悔いのない残りの人生を全うしたいと決意した。幸い帰りを待つ愛妻の存在が救いである。立ち直って欲しいと心から願う。



社会貢献作業を通して

盛岡少年刑務所 E・S

現在私は盛岡少年刑務所の刑務作業の一つとして介護施設の車イスの清掃を行っています。

また、最近は車イスだけでなく空気清浄器と輪島塗の食器の清掃も行いました。

車イスは座面について骨組のところについていたりしている食べカスやゴミ、汚れといったものを洗剤や高圧洗浄機を使って落とし、髪もしっかりと取り、シートやマットも洗ってかわかしてほこりなどを取ります。そしてかわいたら車輪を取ってすき間につまっている髪やゴミを取り、滑りが悪ければ油をさしてマジックテープのほこりや糸くずを取って、ぬれタオルでふき上げて仕上げていきます。

これを毎月四台やっています。

初めてこの作業をやった時に私は正直めんどくさい、ここまでやる必要はあるのかなといった思いが少しありました。ですが、これも作業の一つと考えて清掃を行っていました。

このような考えで作業をしていましたが、この後すぐに行われた車イスの引渡し式のおかげで考えが変わりました。

車イスの引渡し式とは車イスを預けてくださっている施設の方が来所して清掃した車イスを受刑者がその方に手渡すというものでした。

私は渡す役でもありませんでしたし、なにかその場で役割があったわけでもありませんが、清掃を行った工場の一人ということで式に参加しました。

その式では施設の方が感謝の言葉や車イスを使っている方々のことなど色々話をしてくれました。

特にどの言葉が残ったというのはありませんが、話を聞いていて、自分がやっている作業はこうやって人のためになっているのか、多少でも役に

立っているのかと思うことができました。

車イスというのは足が不自由でうまく歩けない方や歳を取って歩けない方といった不自由を抱えている方が使用しているものです。

私達が清掃しているものは老人ホームの車イスのため使用しているのはお年寄りの方々なので体力低下などで歩くのが大変、歩けないお年寄りの方々の役に立っていることになりました。

それに思い至った時、めんどくさいやここまでやる必要があるのかという思いが少なくなり、感謝の言葉を聞いて、逆にちゃんとやろうという思いがわきました。

誰でも感謝されるのは嬉しいと思いますが刑務所で、それも刑務作業で感謝されるというのは特別な嬉しさがありません。

車イスには残飯や食べ物の汁がついていたり尿がついていたりキレイとは言えませんが正直に言えば汚いですが、それを使わないと生きていけない方はそれでもその車イスを使うしかありません。

そこを考えると自分達がこの車イスをしっかりとキレイにしてそれを使ってもらうことで気持ちよく使ってほしいと思えるようになりました。

刑務所はほとんど社会とのつながりはなく社会の人の役に立つ、貢献することはほぼできないと思いますが、その数少ないことが出来ることにもっと感謝をして作業をしていこうと今は考えています。

最近では空気清浄器と輪島塗の食器の清掃を行い、この私達がキレイにした空気清浄器が使用されている施設の役に立ち、ほんの少しでもありがたいと思われたら嬉しいし、やったかがあると思っています。

食器については今年あった能登地震の復興支援につながることで、そこも頭に置いて行いました。

受刑者が少しでも関わった支援の手伝いをしたというのは多分知られることはないと思いますが、それでも役に立ったかもしれないし、自分達がキレイにした食器が他の人の元いき、そこで喜ばれて、役立てばいいなと思って行いました。

社会貢献というのは数少ない受刑者が社会に出来る恩返しであり役立てることです。

それを念頭に置いてこれからも作業を行いたい、そう思っています。刑務所にいることで社会から離されていますが、こういった形で社会とつながり、迷惑ばかりかけていた自分が役に立てている、それを知れたことが大きな収穫だと考えています。

寸評

刑務所作業の一つとして、介護施設の車椅子や空気清浄機、輪島塗の食器を清掃している。最初はめんどくさいと思ったが、車椅子の引き渡し式で、施設の人から感謝の言葉を聞き、自分の仕事が人のために役立っていることを知った。また、輪島塗の食器を清掃する仕事も、能登半島地震の復興につながるので、意義があるのだと思った。刑務所は社会から離れているが、役に立つこともあると実感した。貴重な体験である。



バター茶

宮城刑務所 桜子

バター茶を飲むと、やっとチベットにきたなという気がする。

中国雲南省の省都昆明^{グンミン}まで日本から一週間。台湾と変わらぬ緯度なのだが、標高千八百メートル程のこの街は常春^{トウチン}の景勝地だ。ここから西へ三百キロ、標高三千メートルの交易地下関^{シヤウアン}まではバスと相乗りトラックを乗り継いで五日。更に北の宿場町奔子欄^{ベンツラン}まで、四百キロ近い山岳路を地元の商トラックは途中の村々に寄りながら二週間をかける。そこから徳欽^{ドゥチン}までは四千数百メートルの峠越えだ——そうした旅をすることがあの時の老僧に対する私なりの答えだった。

「気分が悪くなったら言ってくれ。」

運転台の青年が声を掛けてくる。何でも、バスの運転手をしていた頃、日本人が何人も高山病にやられるのを見てきたのだと言う。「日本人は蝗^{いなご}だ。ワツと押し寄せて来ては土産物^{みやげ}を買い漁り、土煙を上げて去っていく。」

青年はその目で私に尋ねる。

「西蔵^{チベット}まで何をしに行くんだ？」

「ラマ層に逢って写真を撮るんだ。」

「そいつはいい。俺の写真を撮ってくれるなら徳欽^{ドゥチン}の先の村まで送ってやろう。」

私が目指しているのは雲南省と西蔵自治区^{チベット}の境の村、溜洞村^{リウトウジャン}だった。荷を下ろしたトラックは村までの百キロ程を瀾滄江^{ランツァン}に沿って走る。南へ向かって流れるこの河は、雲南省を流れ下り、ラオスとミャンマーの国境河川となり「メコン」と名を変える。

「今年は雨が多くてな。」

覗いてみると、以前にきた時よりも増水しているように見える。河岸の所々には経文を記した白い幡が激流に耐えていた。

この地のチベット族は、死者の亡骸をこの江^{ジャ}に流すのだという。命なき

肉体は古着のようなもの、この江^{ジャ}の魚達の食餌となれば少しでも生命の役に立つ。それが功德となり、来世で幸いをもたらすのだと信じている。

青年の親切はポラロイドの礼^{れい}というだけではなさそうだった。

村は何も変わっていないかった。石を積み、泥で固めた家々は、どれもよく似た形をしているが、尋ねる家を見忘れてはいなかった。

「あれまあ、長^{ちゃん}さん、久し振りだねエ。」

お婆さんが顔を皺だらけにして頬笑む。

「息子ももうすぐ帰って来る頃だ。さあさあお入り、バター茶でも淹れてあげよう。」

外周りは石と土でも、家の中はふんだんに木材が使われ、梁や柱には様々な文様が彫られている。中央に切られた大きな囲炉裏では銅製のごつい葉缶が湯気を上げていた。

お婆さんは幾年も使い込んだ木筒を手にする。この辺りのチベット語では「スラ」と呼ばれる縦長の桶のような筒だ。その中へレンガのように固められた茶葉を削り入れる。葉缶の湯を注ぎ細長い棒でゆるゆると掻き回し、ヤクの乳で作ったバターをひと掴み、塩をふた匙ほど落としてまた掻き混ぜる。茶葉が馴染むまではゆっくりと、葉が開いてきたならば勢よくジョグジョグと攪拌するのである。

程良く混ったら、一旦、茶漉を載せた大きな急須「ジュー」へ移し、鉢のような茶碗に注ぎ直す。これがチベット語で「ツァ」中国語なら「酥油^{スーユウ}茶」と呼ばれるバター茶だ。

「これがそんなに好きかね。」

寄り道する家々で何度も御馳走になるのだが、ここのバター茶は格別だ。それを伝えると、お婆さんの目はいつそう嬉しそうに笑う。

「そうだ、忘れないうちにこれを。」

大理の市場で買った「乳扇^{ルシーファン}」というチーズで、その名の通り扇形の干しチーズだ。

「おやまあ、これは珍しいものを。」

お婆さんの喜ぶ顔を先年亡くなった祖母に重ね、私はバター茶の井に顔を埋める。

バター茶は“お茶”というよりも塩味のラーメンスープのような味がする。土地の人と暮しを共にすると、これはつまりチベット人の“味噌汁”のようなものだと思付く。

家畜を逐い、山野に分け入って葉草を採る（雲南から西蔵のこの辺りは“冬虫夏草”の名産地なのだ）という暮らしには茶葉のビタミンとバターのカロリー、そして、汗で失われた水分と塩分の補給に、バター茶は欠かせない飲み物であり食品だった。

器には注いだバター茶を啜り、ややぬるくなった茶の中に裸麦の粉“ツァンパ”を山盛りに加え“葉指”でこね、団子のようにして口に放り込む。

朝も昼も夜も、バター茶があつてこそその三食なのだ。

「飽きないですか」と尋ねたことがあつた。すると、あの時、あの老僧は質問の意味すら解せぬというように、こう答えた。

「お前は自分の手足、自分の肉体に飽きたことがあるのか？」

私は想いに浸りながら茶を嘗めていた。

「やあ、長さん。今年も来ましたね。」

日本を発つて以来、ほぼ一カ月振りで耳にする日本語だった。

「やあ、ユンさん、またお世話になりますよ。」

私は片言の現地語で話す。

毎年、西蔵詣でをする私を変人カメラマンとするなら、ユン青年は中央政府での出世の道を自ら蹴った変人エリートだった。

「学校運営の方はどうですか？」

「やっと今年から自治区の認可を貰いました。でも、教科書は自腹ですよ。」

ユン青年と知り合ったのは五年前、日本山岳会がヒマラヤ（珠穆朗瑪）

へのチベット側登頂ルート開拓のために先遣隊を派遣した時だ。中央のエ

リートだった彼は通訳として、そしてお目付け役として、私は先遣隊のお

抱えカメラマンとして参加していた。

日中合同のルート開拓そのものは予定より早く進み、一行はヒマラヤトレッキングを楽しむ余裕があった。そして、私達はあのラマ僧に出会ったのである。

それはベースキャンプの当たりをつけた標高五千メートル付近、ガンジス川につながる支流のそばだった。老僧は十数頭のヤクに水を飲ませていた。地元のポーター達は誰言うともなく手持ちの食料を布施し始めた。

ユン青年はチベットの蒙味の現況だと厳しかったが、私は興味半分、面白半分といったつもりで乾パンを布施し、渋るユン青年を説き伏せて通訳を頼んだ。

（名は“ツォン”と言う。年齢？ さて、この世に生まれて随分とたつからなあ。）

「ヤクを飼って暮してらっしゃるんですね。」

（いや、違う。僕はヤクに養われているのだ。）

「しかし、こうしてヤクを逐つて来ている。」

（今頃のこの辺りは良い草が生える。ヤクはそれを知っているからここへ来た。僕はその後を随って来ただけだ。）

「冬はどうなさっているんですか？」

（山を降り、西の方、岡底斯の山々へ。ヤク達は草の生える土地を知っている。）

老僧の言うのは地名すら定まっていないうトランスヒマラヤの山奥だった。

「それが老師の修行ということですか。」

（いや、これが僕の暮しというだけのことだ。）

「一年中、山から山へ、生活も大変でしょう。どうして村へ下りないんですか。寺院もあり村人も多ければ托鉢も楽でしょうに。」

（さて、おかしな事を言う。山々に絶えることのない草をヤクが食む。ヤクと共にあれば凍えもせず、飢えは乳で満たされる。この暮しのどこが大

変なのだ。それよりも僕は聞きたい。お前は遙かな地からこの山々を訪れ、

これより先はヤクすらも足を向けぬ山の頂へ登ると言う。西蔵人のお前は

それを助けるために異国の言葉を学び、あの村人共はその荷を負って暮しの糧を得るのだと言う。お前達はそうまでせねば暮していけぬのか？町には何でもあると言うたが、お前達の言う“町”とは、何とも大変なところではないか。）

私達は言葉を返せず、老僧は雲の行方を窺うようにヒマラヤの頂を仰いだ。

翌朝、空が白む前に僧の姿はヤクと共に消え、消え去ってみて初めて、私は一枚の写真も撮っていないことに気付いた。

「あのラマ僧のことを考えていたんですね？」

「分かりますか？」

「分かりますとも。長さん^{チアン}がバター茶を飲んでいる時はいつもそうですからね。」

そのユン青年は、あれから国の勤めを辞め、村へ戻って寺子屋のようなものを始めた。

「“科挙”の時代でもないでしょうに、親戚中に失望されました。でも、私は私の持っているただひとつの財産を“布施”したんだと思っています。分かりますか？」

「分かりますとも。」

大きく頷き、そして私は西藏^{チベット}詣でを始めた。

「今年は逢えそうですね？」

「さて、どうでしょう。大洋の小舟、砂中の黄金^{きん}、ヒマラヤのラマ僧ですよ。」

私は笑ってバター茶を飲み干した。

明日の朝は早い。

寸評

中国でラマ僧に会って写真を撮るのが目的の旅。雲南省とチベット自治区の境、何度も訪ねたことのある村で、顔見知りのお婆さんから、バター茶をご馳走になった。現地特有の飲み物で、その材料やお茶の入れ方を詳しく紹介している。また、ヒマラヤ登山のベースキャンプで知り合った地元ユン青年の通訳で、ラマ僧と話し合った思い出も綴っている。本欄では珍しい現地の気候風土が濃密に立ち込める紀行文である。



人の道

青森刑務所 A・T

私の好きな言葉の一つに、“禍福は糾える縄の如し、吉凶は糾える縄の如し”意味は同じですが、こういった言葉があります。

これは、私の人生の師と称している方から教えてもらった言葉で、これから記す私の話の中で、私に非常に大きな影響を与えてくれた方です。意味は、人間の幸不幸はより合わせた縄のようにたがいに裏表をなして変転するもの。という意味です。

簡単に言えば、人生には良いことだけでなく悪いことも起こるから備えることは大事だぞ。といったことと、私は勝手に解釈しています。

さて、時は二〇二四年。今年の始まりは、被災地に今も尚、甚大な爪痕を残した天災、そして連日続いた羽田空港での事故。そんな不穏な幕開けから、早いもので、もう夏も終わる頃となりました。

上半期だけでも、様々なことがありました。ロシアとウクライナの戦争も未だ収束せず、イスラエルとハマスも緊迫状態が続いたりと世界では目をおおうばかりの悲惨な光景が広がっています。世界がこんな状況の中、なにに不自由なく着るものがあり、寝食欠くことなく暮らすことができていることに私達は、感謝しなければならず、目の前の当たり前は、誰かの苦労が積み重なったものということは忘れてはならないことです。

本来なら、こういった考えが、在社会時の心の常であれば、こういうところにも来ず、もう少しまともな生活、人生が送れたかもしれません。ですが、在社会時の私は、金だけ、今だけ、自分だけ。価値基準がないから、判断基準がなく、目先の損得で選ぶ拝金主義に成り下がり、わずかな得を追い求め、大きな徳を失いました。

ですが、幸い私にも嬉しいことに、声を掛けてくれる仲間も居て、よく周りからは、まだ三十代で若いんだからいくらでもやり直しがきく。と温かい言葉をかけてもらうことも多々あり、それはとても嬉しいことです。

ですが自身の社会人としての責任が欠如しているのも然り、ここ最近の十年間で約二年少ししか社会に居ることができず出たり入ったりを繰り返す中で、その度に、自ら真つ当な道を外れ、人の目を気にする生活が当たり前になり果たして本当に真つ当にやり直せるのかと、自分自身に疑心暗鬼になっていました。

人は誰しも失敗をしますし、失敗をするからそこに学びがあり成長することが出来ます。ですが、疑心暗鬼になっていた私は、そんなことすら前向きに考えられない程に腐りきっていました。終いには、金を追いかけて金につまずき、地位を追いかけて地位につまずく。欲を追いかけて悦に浸り、とたんに足をすくわれました。欲しいものには手段を選ばず、自分の思い通りに物事を進めるためには何でも利用して構わない。こんな考え方がすぐに出てくる始末です。これが私の物心ついたときからの生活、環境から根付いた自身の深い問題です。

こうした拘禁生活を送る中で、それぞれ刑期の長短はあれ皆が、出所という人生の再スタートに向かい、刑期を全うしています。

限られた時間ではありますが、限られた範囲やルールの中で自由な時間を過ごすことができます。私達は犯罪を犯し社会から隔離されていますが、時間だけは、隔離されている今でも、社会と同じく誰しも平等に与えられ、過ぎていきます。

この過ぎていく時間。私達の過ごしている今この時間は、社会のそれとは異なり、実質、“止まっている時”と言っても過言ではないでしょう。ですから、出所の頃と言えば、自身が務めた期間、それ以上に、マイナスからの再スタートになります。

この期間をどう使おうが、人それぞれです。いたずらに時を待つのも一つです。

様々なときの使い方がありますが私は、今後の自身の道、人生を考えたときに、少しでも、このマイナスの時間をゼロにもつていけるよう時を使うことにしました。

自分自身を内観し、自身に深く根付いた問題がどれだけ深刻なのか、物事などに対する考え方、他者を尊重し、思いやる心。書き出したらとめどない程で、意識して取り組まないと、改善できないような深い問題に、こうして時を使っていると、たくさんの気付きがあります。

私がこうした考えを持ち始めると、不思議なもので社会で待っていてくれる方達からも嬉しい言葉をかけてもらったりと、今までずっと、暗闇の中で、何も考えず歩きまわっていたこの道にも少し光が差してきたように感じています。

こうして日々、自身を内観し、自身の問題にどう対応、対処するのか、自信の今後の道について考えていて、答えはそう簡単に見つかる訳はありませんが、一つ大事なことに気付けたので、何かの参考になればと思います、ここに記します。

人は何のために生きるのかとか、人の道の本分とは、と考えたときに、人それぞれ様々な答えはあるでしょうが、私の考えとしては、“感動を求めるため”と言えるんじゃないかと思いました。人生における感動があるからこそ、そこに生きがいがあり、人生の充実感をもたらしてくれんじゃないかと思いました。目の前の小さな当たり前にも、誰かの苦勞があります。細かいところまで、気を、考えを配り、日々感謝の気持ちをつけない。こうした心構えが“感動”を求めるためには、必要だとも思いました。これは感動を求めるためだけではありませんね。人の道の本分とも言えるかもしれません。

こうした考え方を心の常に置き、焦らず自身を律していければ“禍福は糾える縄の如し、吉凶は糾える縄の如し”私の人生も上向きに進んでいくかもしれません。

まだまだ、自身に根付いた問題を完治させるには、かなりの時間を要することだと思います。何を持ってして豊かなのかは、個人の主観であって、他人と比較して自身の豊かさを推し量ろうとするからいつまでも豊かになれません。自身が満たされないと考え方に偏りが生じ、同じ事の繰り返し

になるかもしれないことでこれも大事な気付きの一つです。

折角、このような考えができるようになり、こうして自身を内観しやすい環境にいるのも何か意味のあることなのかもしれません。であれば、このチャンス逃がさず、出所までまだありますが、自身について、今後の人生、道について深く考え、悩み続け、一つでも多く気付きを得て、もう二度と刑ム所に戻ってこないよう、残りの刑期を全うできたらと思います。これから始まる私の新たな道、良くなるといいな。

寸評

まだ若いのに、目先の損得で拝金主義に走り、僅かな得を追い求めて大きな徳を失った。拘禁生活を送る中で、自分自身を内観し物事に対する考え方、他者を尊重し思いやる心を涵養するなど、さまざまな課題が見つかった。人の道の本分は何か。人生に感動があるからこそ生き甲斐があり、人生の充実感をもたらすのではないか。二度と刑務所へ戻ってこないように、残りの刑期を全うしたい。その意志を貫いて欲しいと佳作に選んだ。



ひたむき

福島刑務支所 小さな革命

私の刑務所生活ももう十年を過ぎた。そして私はこの懲役生活の集大成を迎えている。振り返ればあつという間だったかもしれないけれど、やっぱり十年という時間は決して短いものではないし、当時二十二、二十三歳だった私には自業自得と分かつていても自分の刑期を受け入れるだけで精一杯だった。そんな私がこの十年をどのように進んできたのか、この場を借りて振り返ってみようと思う。

当時、私は自分が刑務所に来るなんて全く想像していなかった（想像して生きている人などほとんどいないと思うが）。なので自分の刑期を務めるために刑務所という場に足を踏み入れた瞬間、異世界に来てしまった：と不安と恐怖でいっぱいだった。当然、目標とかこのように取り組んでいきたいなどの前向きな気持ちを持つこともできず、日々を乗り切ることでいっぱいだった。

そのような生活を二、三年送り、刑務所という場での生活にも慣れ、人間関係のトラブルの回避の仕方也是十分に学んだ頃、私は一つの目標というものを見つけた。

「美容科の職業訓練に行つて、美容師の免許を取りたい」

これがここでの初めて抱いた目標だったと思う。同時にいつまでも同じ優遇で満足するのではなく、工場に一人か二人しかいない一類という人間にいつか自分もなりたいたいと思うようになった。

それから私は様々なことを挑戦するようになった。作業はもちろんのこと、それ以外にも危険物取扱者、ビジネススキル、医療事務、通信教育の数々を取得し、自分の知識をどんどん増やしながら社会に戻つても対応できる自分を目指して努力をした。

そして入所から約五年後、私は晴れて美容科の職業訓練生に選ばれ、他の施設に移送された。楽しみと嬉しさのワクワク感しか抱えていなかった

私は、その後のとてつもない苦労や悩みというのは全く想像していなかった。正直に言つてこの美容科の職業訓練の二年間は本気で辛かった。

何がと言われても言葉にできないくらい辛くて、訓練生同士の関係も技術や勉強についていけない自分も何もかもがしんどくて、何度も途中でリタイアしようと思つたけれど、せっかく私の気持ちを吸んで選んでくれた施設の職員の方々にとても失礼な行為になつてしまうとも思つたし、逃げたところでその先の自分には良いことなど一つもないことも自分なりに理解していたので、苦しいながらも一生懸命、ただ一生懸命頑張つた。

もちろん、楽しいことや嬉しいことも沢山あって、普通であれば経験することがなかったであろう競技大会に参加させて頂いたり、美容師という職業のやりがいや素晴らしいさを改めて知ることができたことは私にとって本当にかけがえのない経験となった。

そして二年間死に物狂いで努力し、挑んだ美容師国家試験。見事に合格することができたという物語ができていればよかったと何度も思つたし、今でも思うときがあるけれど、私は合格することができなかった。二年間頑張つた意味は果たしてあったのだろうか：と落ち込みましたし、せっかく私を選んでくれた職員の方々に申し訳ない気持ちでいっぱい、しはらく立ち直ることができなかった。

ここから気持ちを切り替えてまた頑張つていくことは決して容易いことではなかったけれど、三年経つた今思うのは、あれは私に対しての試験の一つだったのだな、ということ。対して挫折など味わうことなく生きてきた私に、人生とは自分の思い通りにいくことばかりではなく、それを乗り越えて生きていかなければいけないのだというメッセージだったのでないかと思うようになった。そして今の私はあの経験があったからこそ頑張れているし、自分の糧にして前を向くことができた。

ありがたいことに今は多くのことを任せてもらい、責任のある作業に日々取り組むことができています。また、自分が目指していた一類という最終目標にも辿りつくことができた。でも、これで終わりというわけではないし、

ここから私のスタートなのだと思う。

社会に戻る日が一日一日と近づくにつれて、今の私は不安で仕方がない。きちんと社会という場で生きていけるのか、以前と同じような環境に身を置いてしまわないか、多くの誘惑に負けてしまわないか、不安が膨らむばかりだ。

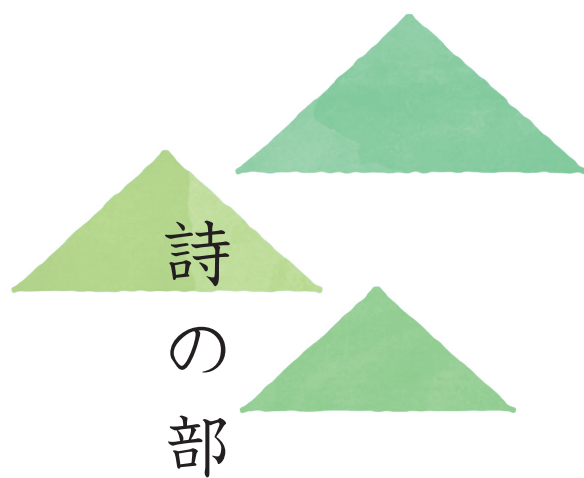
だけど私はこれからは一人の大人として、人として、立派ではなくとも真っ直ぐに生きていきたい。そうでなければ今日まで頑張ってきた長い時間、私のことを今日まで見離さず支えてくれた方々の気持ち全てが無駄になってしまう。時には厳しく、それでも何度も多くのも更生のチャンスを与えてくれながら指導してくださった施設の職員の方々、いつも未熟な私に的確なアドバイスをくださる工場の担当さん、私の帰りを長い間待っていてくれていたたった一人の母親、そして何より私の身勝手な行動によって全てを失ってしまった被害者の方、そのような方々の気持ちを考えると、これからは絶対に道を踏み外したくないと思う。

刑務所で学んだことというのは私にとってとても大きなもので、財産になるようなことばかりだけれど、刑務所に来たことは決して良かったことではない。私が多くなことを学び、経験している裏で、辛く悲しい毎日を送っている人間がいるのだから。

これからはそのような人達にきちんと償いをしながら恥ずかしくないように生きていきたい。そのために一生懸命ひたむきに真っ直ぐ進んでいこうと思う。

寸評

刑務所生活10年。入所当時は異世界に來たようで、不安と恐怖でいっぱいだった。2、3年が経ち、刑務所生活にも慣れて社会復帰に対応できるように、さまざまな資格を取得。美容科の職業訓練生に選ばれ美容師を目指した。合格の夢は破れたが、今思えばあれは自分に対して試験の一つだったと思うようになった。ここからは一人の大人として真っすぐに生きて行きたいという。出所に向けてのさわやかな決意に共感した。



審査員
宮城県芸術協会会員
日本現代詩人会会員
日本文藝家協会会員
宮城県詩人会顧問

原田 勇男



消光 — 死病得て —

宮城刑務所 K・Y

鉄格子てうしの付いた病棟の風の窓は、
青葉の香りを、濃くもなく薄くもなく、
纏めてくれる。

どれどれと

朝焼けの庭を見れば、
そこには形面上の死が

抗いがたく立っていた。

何故なら、

浸潤性膀胱ガンしんじゆん。余命一年の告知から

半年が過ぎたからだ。

つまり、

あと、半年だ。

——三日前に抗がん剤の治療を止めた。

その訳は、

『生きながら針に貫かれた蝶のごとく、

悶えつつなお飛ぼうとする行為だから』
と、言いたいところだが、

本音を吐けば、

全身がバラバラに碎けて、勝手な方向に
駆け出し飛び散って行くような感覚から、
逃げたに過ぎない。

さしづめ、己の弱さよ——。

身かわし身をかわしつつ生き行く吾だが、

死者の側より照明てうらせば、ことに輝き、
ひたすら真紅の生なのではないか。
然さ為すれば、

最終の息する時まで生きなければならない。

また、生きたいと人は思うべきである。

生の終ついに死のあるならず死のありて

生はあるなり生きざらめやも

歳月はさぶしき乳を頒わかてども

復また春は来ぬ花をにかけて

寸評

一読して胸を突かれた。鉄格子のついた病院で難病を患い、余命1年と言われてすでに半年が過ぎた。死と向き合って、あと半年の日々をいかに生きるかがテーマ。抗がん剤の投与に苦しみ、その治療をやめた。だが、「最終の息をする時まで…生きたいと人は思うべきである」と自らを鼓舞する。末尾の短歌二首も、最後まで生きる意志を示し、自分が亡き後も春は花をにかけてくると歌う。まさに死を前にした辞世の作品である。



キンモクセイ

福島刑務支所 K・A

キンモクセイの香りは幸せにしてくれる。楽しかったあの頃を思い出させてくれるから。

キンモクセイの香りは寂しくさせる。悲しい夜と眠れぬ日々を思い出させるから。

橙黄色の香りは一瞬でいろいろな場面を再生させる。笑いあった日、ケンカした日、手をつないだ日、光や音が温度さえ鮮明に浮かんでくる。

ごめんやありがとうを繰り返して、当たり前過ぎていくと思っていた。“当たり前”が当たり前じゃなく、どれだけ尊いのかわかっていなかった。

もつとありがとうを伝えればよかった。ちゃんとごめんねを言えばよかった。もつとああすればよかった、こうしてほしかった。こう言えばよかった、言っただけよかった。数えればキリがないほど後悔も未練もたくさん残っている。

だからこそ今、ごめんねもありがとうもまっすぐ伝えたい。

キンモクセイの香りはごめんねとありがとうの大切さを教えてくれる。

キンモクセイの香りは優しさを勇気、今を生きる強さを与えてくれる。

橙黄色の小花が咲く頃、小さな花束を持ってありがとうを伝えよう。ごめんねを言えなくてごめんね、とも。

あの頃とは映る景色は違うけど、もう大丈夫。これから先も悩みや迷い、楽しさや悲しさも含め、たくさんさんの思い出が作られていく。そのたびにまたごめんねとありがとうを繰り返してキンモクセイの香りに思いを馳せる。

キンモクセイの香りは……。

今年もまたキンモクセイの香りが風に乗って大切なことを伝えてくれる。会いに来てくれる。

ごめんね。ありがとう。

寸評

秋に咲くキンモクセイの香りにまつわる愛らしい作品である。相手は恋人だろうか。橙黄（とうこう）色の香りは一瞬でいろいろな場面を再生させる。笑いあった日、ケンカした日、手をつないだ日、光や音や温度さえ鮮明に浮かんでくる。しかしそのころは当たり前の日々がどんなに尊いものか、わかっていなかった。だから今こそ「ごめんね」も「ありがとう」もまっすぐ伝えたい。そんな心情が優しく表現されている。



たったひとつの命だから

山形刑務所 十三郎

たったひとつの命だから
どんなものより大切に
かけがえのない命だから
現在を 真剣に生きよう
気乗りしない日であつても
一日一日を 大事に生きよう
笑いながら ワクワクしながら
現在を 前向きに生きよう
つらくて 苦しくて
弱気になることがあつても
現在を たくましく生きよう

生きていくことは
心がウキウキすることより
悲しくて せつないことが
多いけれど
自分をごまかして
頑張らなくても いいんだよ
自分の心にフタをして
良い子じゃなくても いいんだよ
自分の気持ちを偽って
笑ってなくても いいんだよ
あなたは あなたのままで いいんだよ
だから もっと自分に素直になろうよ

この世に生を享けることって 奇跡
命を授かることって きつと
神様から 大切な何かを託された証
でも この贈りものは
実は とても繊細
傷つきやすく 壊れやすいもの
それは あなたの周りにも 言えること
だから
命も粗末に扱わないで
お互いに いたわりあつて 支えあつて
手を取り合つて 生きていこうよ

たったひとつの命だからを

寸評

命の賛歌である。私たちは毎日、悩んだり苦しんだりして生きている。だが、よく考えてみたら、この世に生まれたこと自体が奇跡で、かけがえのないたったひとつの命だから、現在を真剣に前向きに生きればいいと呼びかけている。だが命はとても繊細で、傷つきやすく、壊れやすいものだから、命を粗末にしないで、お互いにいたわりあつて、支え合つて生きて行こうと励ましている。不安な時代だが、命を大切にしたいものである。



花の世界

宮城刑務所 T・S

花が好きだ

人工的に造られた花も 野生に育つ花も

みんな好きだが やはり見ていて

一番心が安まるのは 野生に咲く花

昔の人が感じたままのような

素朴な名も心惹かれる

草むらの中で

たった一輪見つけた すみれ

夢のように煙っていた 松虫草たち…

みんなひそりと慎しく美しい

こんなふうに生きて行けたらと思う

花はそれぞれに似合った色 それは

夜明け色の ライラック

夕焼け色の さるすべり

夕暮れ色の あじさい…

そう呟くと 空一面にその花が開く

少年の日の遠足で

太陽の光を吸い取ったような

野生の芥子の花を見つけ

興奮して摘み採ったことがある

でも すぐ後悔した

心ないことをしたと思った

花にもそれぞれの世界がある

摘んでいい花 いけない花
生花として生きていける花
生彩を失ってしまう花…

私の世界はどうだろう

悲しみの世界に閉じ籠もり

いつもなも悲しみの歌を唄う

私には喜びの歌を 幸せの歌を

唄える日が来るのだろうか

しみじみと秋が心に滲み入る日は

怒っても悲しんでも 所詮は

何ひとつとして変わることなく

時は過ぎ去って行く…

寸評

花の賛歌。造花よりも野生の花を愛する。花の思い出がいろいろあって、その折々の記憶をたどる。花にもそれぞれの似合った色がある。夜明け色の「ライラック」、夕焼け色の「さるすべり」、夕焼け色の「あじさい」…。少年の日に遠足で野生の芥子の花を見つけ採ったことを後で後悔した思い出。自分の世界を考えると、悲しみから喜びや幸せの歌を歌える日がくるだろうかと問う自分がいる。花と現実の裂け目を生きている。



私の手

福島刑務支所　くろんぼ

人を 傷つける 私の手
人を 悲しませる 私の手
人を 苦しませる 私の手

そして

大切な人を 自ら離れた 私の手

こんなにも 汚れてしまった 私の手
汚すことで気づけた 醜い 私の手

こんな 醜い 私の手なんて 要らない
消してしまいたい
けれど

私の手でも 何かできる
醜い 私の手でも
汚れてしまった 私の手でも

誰かに 希望と夢を 与えられるかも
誰かのために生き できることあるかも
勇気をもって 誰かへ 伸ばしたい 私の手

自分と 他人 傷つける 私の手

汚れてしまった 私の手でも
できることが きっとある

どうか 私の手が
誰かの 為に生きる 優しい 手に

汚れた 私の手が 変えられますように

汚れた 私の手で 人を幸せに

汚れた 私の手で 人の痛み分かるように

汚れた 私の手は 変える義務がある

汚れた 私の手でも できること あった

どうか この思い 届きますように

寸評

自分の汚れてしまった手を見つめて自問する。人を傷つけ、悲しませ、苦しめた手。こんな自分の手でも、誰かに希望と愛を与えられるかもしれない、誰かのために生き、できることがあるかもしれない、勇気をもって誰かへ伸ばしたい手。この希求の願いがこの詩の核になる。汚れた私の手でも、できることがあった。どうかこの思いが届きますように。自分を反省し、新しく再生しようという人に、どうか恵みをと祈りたい。



三日月の夜

福島刑務支所 K・M

7歳の誕生日に初めて飛行機に乗った。
行先は親が決めた国で観光スポットを回った。

そのたびで心に残ったものは飛行機でも遺跡でもなんでもなく、そこに
いた自分と同じ年くらいの子供だった。

痩せて服もボロボロで小さな手で物乞いをする。
世界には一日までもに食べられない子供がいる。

『家が無く路上生活をする子供』

『自分の名前も年も知らない子供』

途上国の子供への保護意識の低さを知った。

同じ一つの星に生まれて与えられた環境に苦しめられてる。

どんな夜を迎えてどんな朝を待っているんだろう。

当たり前に出るあたたかい水に申し訳なさを覚えた。安全な家の中に自
分の部屋があつてキレイなシャツに布団。

その夜は眠れなかった。

世界を知っていくほど、あの“三日月の夜”が胸に深く刺さる。

忘れない絶対。

忘れてはいけない絶対。

寸評

7歳の誕生日に初めて飛行機に乗って親が決めた観光スポット
を回ったが、印象に残ったのは飛行機でも観光地の遺跡でもなかつ
た。自分と同じ年ごろの少年。痩せて服もボロボロで、小さな手
で物乞いをしていた。世界には一日までもに食べられない子ども
がいる。その後、世界を知っていくほど、三日月の夜が胸に突き
刺さる。世界中の飢えた子どもたちに支援を。この筆者の声を私
たちは見過ごしてはならないと思う。

短歌の部



審査員

日本歌人クラブ会員

「地中海」会員

宮城県芸術協会 運営委員

宮城県歌人協会 「地中海湾の会」代表

上林 節江 先生



金

やんわりと絞ったタオルで 我が獄居
三度目を拭く 出所の朝に

山形刑務所 緑樹

★寸評…「獄居」とは、服役中の自室のことですね。出所の朝の心情が「三度目を拭く」にうまく表現されています。「一度」ではなくて「三度」だから、思いが強調されて伝わってきます。



金

難聴の母には遠し 面会の
特殊ガラスに 言葉届かず

福島刑務所 北王子

寸評…ガラス越しの面会で、難聴の母には十分に言葉が届かないのでしょうか。それでも母は来てくれます。そこに感謝しつつも、もどかしいのでしょうか。感情語を使わずにその切なさを表現して、いい作品です。



銀

手を繋ぐ 頭を撫でる こんなにも
手から愛情 伝わる想い

秋田刑務所 T・K

寸評…繋ぎ合う手、頭を撫でる手に、あふれる程の愛情が伝わることに気付いた作者。「こんなにも」は思いの深さを表す言葉。一首全体からやわらかさが滲み、いい短歌になっています。



銀

どの雲もくじらに見える 夏があり
君を家族と呼んでもいいか

福島刑務支所 T・M

寸評…「君を家族と呼んでもいいか」の呼び掛け風の表現が秀逸。「君」とは「くじら雲」のことでしょう。「どの雲も」が切ない。それ程に孤独で寂しい心情なのだと伝わります。



銅

出所の日 思いついて見入る 求人欄
かすかに見えた 希望の光

盛岡少年刑務所 T・R

寸評…出所したら、きちんと働き、しっかり生きようという気持ち「見入る求人欄」により伝わります。そして、「希望の光」を見つけたのでしよう。作者の前向きな気持ちが明るい短歌になりました。



妻逝きて 半年が過ぎ 自炊にも
慣れたつもりが 無洗米とぐ

宮城刑務所 K・Y

寸評…「無洗米」は、糠をすでに除去してあり洗う必要のない米。それを研いでいる自分に気付き、妻の亡き生活に慣れていないことを噛み締めています。「慣れたつもりが」の表現が心に沁みます。



絵はりし 蜜柑一個に 古里の
団欒見ゆる 大晦日の獄

宮城刑務所 桜子

寸評…一個の蜜柑は、年夜の祝いに支給されたのですね。それは、古里の年夜の一家団欒の記憶を呼び起こし、ミカン色の暖色。しかし現実には獄。そのギャップが短歌のモチーフになりました。



一時も 放さず抱けば 石塊も
小猫のような 温もりくれる

山形刑務所 秋兎

寸評…「小猫のような温もり」という比喻が、一首に効果的な力をもたらしています。「石塊」は小石のことですが、他の意味もありそうな気がします。心の底にあるのは寂しさでしょうか。



手紙書く 人の想いを 受け止める
いつもありがと 丸ごとポスト

福島刑務所 O・F

寸評…「丸ごとポスト」とは、上手な表現。「ポスト」とは自分自身なのは。「書く人の想いを丸ごと受け止める私」というように伝わってきて深いのです。独自の表現を見つけましたね。



足元の 小さき花の まん中に
ダイヤのごとく 光る夜露よ

福島刑務支所 F・N

寸評…発見したことをよく観察して、適切な言葉を選び一首にした点が、素晴らしいです。「足元の」「花のまん中に」「光る夜露」と、しっかつかみ、繊細な感覚で美しく仕上げました。



花火見て 帰る途中に ゴミ拾う
清掃員が 眩しく映る

青森刑務所 科学者

寸評…「眩しく映る」の表現が入賞の決め手になりました。ここには、作者の思いが豊かに籠っています。いい場面を目にし、それに賛同する気持ちがあつてこそ生まれた短歌だと思いました。



亡き祖母の 前掛け付けた 妻が来て
何も話さず 涙をこぼす

宮城刑務所 N・S

寸評…夢の場面でしょうか。「亡き祖母の前掛け付けた妻」の具体が、リアルに家族の良い姿を伝えています。「何も話さず涙」の表現が深い。涙をこぼすのは妻だけでなく作者もたと伝わりますから。



一生で 一緒の時間 どれほどか
会う度思う 親の顔見て

山形刑務所 龍齋

寸評…「一生は長い」としても「一緒の時間」は短い。親と子なら尚更に。この嘆きは、万人のものかもしれません。一つの真理を言い当てています。長さよりも、深さが大事かもしれません。



秋風が 北の窓から 吹いてきて
夏に疲れた 身体を癒す

福島刑務支所 N・K

寸評…「北の窓から」に、観察の確かさが見えます。近年の夏の暑さは凄まじく「秋風が夏に疲れた身体を癒す」は、実感として共感する人は多いでしょう。季節の変化をうまく詠いあげました。



八月の 熱気のなかの この今を
大股歩き 渡り切る我

福島刑務支所 F・H

寸評…「大股歩き渡り切る」に、炎夏に立ち向かう気力が見えます。こういう立ち位置からの詠みは斬新です。「大股歩きに」と助詞を一つ入れて次の句に繋げると、一首がなめらかになります。



好きなだけ 家族と話せた 日常の
幸せ 気付いた 面会 終えて

福島刑務支所 雪音

寸評…失った時にその価値に気付くとはよく言われています。今は家族の会話は制約的ですが、それが現実。そこから何を学ぶかが大切では。「幸せに」と助詞を入れてしつかり言うといいですね。



志 諦めていた 堀の夜
背中を押した 打ち上げ花火

福島刑務支所 S・S

寸評…「志（こころざし）」とは、高らかに勢いのある語を引き寄せました。打上げ花火は、ドーンと一発大きく鳴り響きます。その音を捉えて「背中を押した」と氣力に結び付けた点が成功しました。



神仏の 慈悲を祈りし 我が罪を
洗い流せと 梅雨の安居に

宮城刑務所 M・D

寸評…「安居（あんご）」の語が目を引きました。意味は「一か所で修行する」です。わが身を重ねているのでしょうか。「流せ」と「梅雨」は縁語。「祈りし」は、「祈りぬ」か「祈りたり」に。今、祈っているのですから。



年とつたら 人のかげ口 愚痴言わず
いずれお世話になる身でんがな

青森刑務所 T・H

寸評…格言のようないい内容なので採りました。「でんがな」の口語調の表現は賛否分かれる点かと。私は、この表現は俗調に感じますので普通に表したほうが短歌の品位が保てると思う派です。



かすかなる 地震^な去りゆけば 朝明^{あけ}けの
獄舎に疾風^{かぜ}の 走る音する

宮城刑務所 T・S

寸評…「かすかなる地震」「疾風の走る音」により、獄舎の夜明けの静寂が伝わります。作者は、その静寂に耳を澄まし身を委ねています。ひと時の平安のように。語に無駄がなく、まとまっている作品です。

俳句の部



審査員

日本文藝家協会会員

日本伝統俳句協会東北支部事務局長

俳句会「楡」主宰

赤間 学 先生



金

芝桜 起伏の形の 風の色

宮城刑務所 M・K



金

春眠の 貌にすべてを 許しをり

福島刑務所 北王子



銀

龍天に登る五十路の 学びかな

宮城刑務所 伏龍



銀

語り部の 視えぬ古庇 原爆忌

福島刑務所 I・D



銀

山桜 空はマチスの 青になる

福島刑務支所 S・S

寸評…季語は「芝桜」で春、晩春。桜に似た五弁の小さな花を紙訟のように敷いて咲かせる。掲句は芝桜を長い間見とれていたところ、起伏のままの芝桜の風の色を見つけてそれを写生した。そこが塩梅のいい色合いの一句になった。

寸評…季語は「春眠」で春、三春。春の眠りをいう。長閑で暖かい春は寝心地よく夜が明けても、中々目が覚めない。掲句は春眠の顔を見ていると、すべてを許すという意であろうが、心が季語と向き合って出た手掴かみだからいい。

寸評…季語は「龍天に登る」で、春、仲春。中国の古代伝説から龍は想像上の動物で春分の頃に天に登り雲を起し雨を降らせる。掲句は春の恵の雨が五十路の学びのような気がすると詠んでいる。季語の幹旋が成功している。

寸評…季語は「原爆忌」で秋、初秋。8月6日が「広島忌」、8月9日が「長崎忌」。立秋は8月7日頃。故に「広島忌」は夏としている。掲句は原爆資料館での語り部に見えない傷跡があったと。思いやる心が見える句になりましたね。

寸評…季語は「山桜」で春、晩春。山桜は、本州から九州までに分布する野生の桜で、開花とともに赤紫色の新葉が展開するのが特徴である。掲句は山桜の満開のときの美しさをマチスの青の空に咲くと見立て色彩豊かな句になった。



銅

夕芒 手招く吾子と 影繋ぐ

青森刑務所 兎魂



銅

星涼し 港に百の 船眠り

宮城刑務所 飛忍



銅

幼子の 顔の高さの 風車

山形刑務所 夜風



銅

春落葉 片方だけの スニーカー

福島刑務支所 Y・H



銅

星が降る 寒夜の獄に 母想う

盛岡少年刑務所 T・R

寸評…季語は「芭」で秋、三秋。秋の七草のひとつである。月見のおそなえとして秋の代表的な植物。掲句は私を手招く吾子の影が夕暮れの中に繋がって、芭の揺れの中に見えている景を詠んでおられる。懐かしい哀愁漂う句である。

寸評…季語は「星涼し」で夏、三夏。夏の夜空に輝く星のこと。高原で仰ぐ星は殊に涼しい輝きを放つ。掲句は高台から夏の夜空の星を見ていると、眼下には港が広がり百ほどの船が停泊している。その景の涼しさに感嘆している。

寸評…季語は「風車」で春、三春。風の力でくるくると回り、一年中手に入るが、春風を受けて軽やかに回る様子はいかにも楽しいので春の季語となった。掲句は幼子が顔の高さで風車を廻す景を示し、楽しい気分を詠んだ、のびのび。

寸評…季語は「春落葉」で春、晩春。晩春に古葉を落とす椎や榎、楠などの常緑樹落葉のこと。掲句は「落葉」でなく「春落葉」という少し違和感のある季語をあて、中七の「片方だけの」と響き合って、取り合わせの俳句に仕上げています。

寸評…季語は「寒夜」で冬、三冬。冬の夜、夜半の冬、等とも。尚「夜寒」は晩秋。寒夜はさえずえと空気が澄んで、星や月も美しく見えるという意味。掲句は冬星の空を窓から見ると待っていてくれる母をふと想ってしまうという句。



佳

何処から出でしや庭の親子熊

青森刑務所
T・H



佳

鍵音の後に足音冬の夜

宮城刑務所
N・T



佳

風鈴の音色誘う眠気かな

宮城刑務所
M・D



佳

なまはげ来泣く孫抱いて笑いけり

秋田刑務所
T・T



佳

花火舞う格子の先に未来みる

秋田刑務所
K・T

寸評…季語は「熊」で冬、三冬。日本ではツキノワグマとヒク守マの二種類。ツキノワグマはおもに本州に棲み、木登りが上手。ヒグマは北海道でどう猛である。掲句は山に団栗等が不作だと親子熊が町に出没する、実家は大丈夫かな。

寸評…季語は「冬の夜」で冬、三冬。掲句は寒い夜の静かな部屋で待っている。誰を待っているかは詠んでないが、読者の楽しみに。私は子供が玄関ドアの鍵音の後に元気な足音が聞こえてくる景に冬の夜の待つ母の顔を思いました。

寸評…季語は「風鈴」で夏、三夏。夏、その涼を聞いて涼を得るための小さな鐘のことである。鉄は南部風鈴、ガラスは江戸風鈴が有名。掲句はその風鈴の音色が眠気を誘うという滑稽味のある句。その音色から南部風鈴ですかね。

寸評…季語は「なまはげ」で暮、新年。大晦日に秋田県男鹿半島で、行われている行事で、村の若者たちが「泣く子はいねん」と鬼の面で家々を訪問する。掲句はなまはげが来て泣く孫に家族が笑い合っている景の句。臨場感がある句だ。

寸評…季語は「花火」で秋、初秋。火薬を組み合わせ、夜空に高く打ち上げて爆発の際の光の色や音を楽しむもの。主催者の他、住民が花火を奉納する場合もある。掲句は格子の窓からの花火に未来があると詠んだ句。強い決意を感じた。



窓にはりつき すき間からみる花火

福島刑務所 連雀



天の川 文読めば 汝が声聞こゆ

福島刑務支所 M・M



地球より 小さな虹の 大きかり

福島刑務支所 T・M



新涼や 洗い上がって 犬真白

福島刑務支所 F・H



金木犀 君の姿を 探しけり

福島刑務支所 K・A

寸評…季語は「花火」。掲句は音を聞いたので、何処からかと探して、窓にはりつきながら探すと、遠くで花火の光がちらちらすき間から見えてくる花火があった。景を気付いた順々に写生してゆく表記が成功している句である。

寸評…季語は「天の川」で秋、初秋。天の川が一年中で最も高い位置にかかるのが初秋の八月であり、最も明るく見える。だから秋の季初になった。掲句は天の川を仰げば、貴方からの文の意味が定めのようによく理解できたという句。

寸評…季語は「虹」で夏、三夏。雨の後、太陽と反対側の空に現れるアーチ状の七色の帯。夏の季語になったのは夕立の後あらわれることが多いためである。掲句は地球に虹が小さく掛かったが、作者はその大きな虹に感動したという句。

寸評…季語は「新涼」で秋、初秋。秋に入ってから感じる涼しさのこと。「涼し」だけでは、夏の季語となる。掲句は犬を洗い上げると真白になった。その時の気持ちのいい真白な犬に、秋になって初めての涼しさを感じたという句。

寸評…季語は「金木犀」で秋、晩秋。花は小さいが香りは高く、庭木に広く用いられる。爽やかな風に漂う香り、秋の深まりを知らせてくれる。掲句は秋の深まりに金木犀の香が漂う。その木を君と同じように探してしまおうという句。

川 柳 の 部



審査員

宮城県川柳連盟理事

水戸一志先生



金

マンネリを一つ壊して 脳に喝

福島刑務支所 S・S



金

国ごとに 平和の鳩の色違い

宮城刑務所 K・Y



銀

投擲に 夢のせ高く 初の金

青森刑務所 兎魂



銀

どっちなかな 吾子のほつぺと 林檎あめ

山形刑務所 夜風



銀

蜘蛛の子と 一緒に過ごす 病舎房

福島刑務所 北王子

寸評…習慣とマンネリはちがいます。一つ壊してという謙虚さがこの句を生かしています。気付いたらまずそれから改める。達成感が脳を元気にする。

寸評…何故、戦争は無くならない。利害、主張によって目指す平和の姿も異なる。この現実を単純明快に表現した「平和の鳩の色違い」。みごとに洞察力です。

寸評…女子やり投げでバリ五輪金メダリストの北口榛花選手。いつも笑顔が素敵で、流行語でも輝いた。国民の祝福を一句で代弁した素直な発想を買う。

寸評…幼いわが子の赤いほつぺと、手に持ったりんご飴のツルツルした赤さを見比べ、「どっちなかな」。食べてしまいたいほどかわいいという親ごろろを書いた。

寸評…ベッドに横たわってぼんやり窓を眺めていたとき、偶つこに小さなクモの巣を発見したのかも知れない。内と外、自分とクモの対比が鮮やかで、印象深い。



癌の父死にたくないとポツリ言う

宮城刑務所
N・S



大拳する黄砂 オーバーツーリズム

秋田刑務所
I・K



地図なんか無くて貴方に辿り着き

福島刑務所
A・R



政府から給付どんぐりほしいクマ

福島刑務支所
N・Y



普通っていったい誰の基準なの

福島刑務支所
E・M

寸評…人ががんで亡くなるのが当たり前の時代とはいえ、本人にはさまざまな思いが去来して当然です。下五の「ぼつり言う」の余韻が、この句の全てです。

寸評…中国大陸から押し寄せてくる得体の知れないパワーを表したユニークな作品です。余計な説明を省いた構成が成功しました。

寸評…地図、つまりガイドなどいらない。ハート一つで胸に飛び込んで行く熱い恋心を感じます。スマホ情報に頼りすぎる世相への皮肉のようにも読めます。

寸評…近年、森のクマさんはすっかり悪役になってしまった。人里に来るなどというなら、代わりにどんぐりを与えてよ。日本政府のばらまき給付金を嘔笑うような一句。

寸評…何を聞いても「フツー」としか答えない若者たちの灰色コミュニケーション。考えるより相手を排除した方が楽チンなのか。非常に重要な問題意識です。



鳴く蟬よ 鳴かぬ蜚に 何思う

福島刑務支所 点々

寸評…セミはうるさいほど自己主張します。宵闇の川べりでポツと灯を点滅させるホタルの優雅さをどう感じているのか。人間社会にもこんな関係があるよといった感じです。



ありがとう みんなが喜ぶ 合言葉

盛岡少年刑務所 E・S

寸評…一見、標語のような作品です。川柳は短いけれど詩ですから、感情を込めましょう。ただ、この句の健康な響きは捨てがたい魅力があります。



いつからか あんなに老けた 母の顔

盛岡少年刑務所 T・R

寸評…子から見れば親は空気のような存在でしょう。しかし、離ればなれになり、再開したときに初めてその存在の大切さに気付くのです。正直な感情が句から伝わります。



一本の縄 縫り合うを 母に知る

福島刑務支所 N・K

寸評…稲わらを手のひらでひねりながら縫って縄をなう。縫りがかかっているから、縄はほじけない。昔、母の手元を見て学んだこと。暗示に富んだよい句です。



袋代 2円を惜しみ ネギ片手

福島刑務支所 Y・H

寸評…小さな事だが大量生産、大量消費、大量廃棄のコスト負担を減らそうという決意から生まれたレジ袋の有料化。それを微笑ましい情景で表現出来ています。



読みかけに挟むページは進まない

宮城刑務所 A・S

寸評…分厚い本を一度に読み通すのは困難です。しおりなどを挟んでいったん閉じた後が問題。ワクワクするような内容でなかったら、それっきり。みごとに急所を突いています。



誕生日 喜ぶのには 老いすぎて

秋田刑務所 S・H

寸評…ちょっと悲しくなる内容ですが、口に出して言わないだけで、大方の現実であります。せめて、気持ちだけは若くいたいものです。頑張りましょう。



待ちに待ち 花火終われば ゴミの山

青森刑務所 科学者

寸評…花火大会にはまだ明るいうちから見物人が押し寄せます。最初の発が揚がるまでの長いこと。作者は、そうして楽しんだ人々の夢の跡を冷静に表現しました。



目をそらす バレンタインの 愛娘

山形刑務所 虚空霊

寸評…バレンタインデーのチョコのプレゼントから無視されたお父さん。わが子の一瞬の目の動きを見逃さなかった。ああ大人になったのだなと観念したか。



誰だっけ 聞くに聞けない クラス会

山形刑務所 十三郎

寸評…久しぶりに会ったクラスメート。顔も声の特徴も覚えているが、名前が出て来ない。頭の中でアカサタナを唱えている。それを悟られないように、一苦労します。

文芸部門審査総評

― 作文の部 ―

K・Yさんの「山頭火の宙」は伝記出版に関わった筆者の思いが鮮烈に伝わってくる。文末の「黒染めの衣に袈裟をかけ行脚した、山頭火の見た宙(そら)の青。それは、現代に生きる私達の胸の隅に、ひっそりと隠れている色彩ではなからうか」という結びが美しい。文句なしの金賞である。A・Yさんの『今を』― 一生懸命生きえる』は最も衝撃を受けた作品だった。刑務所生活30年。本人の決意通り、残りの人生を大切にしてもらいたい。

桜子さんの「バター茶」はその土地特有の気候風土と人情味が漂う雰囲気堪能した。E・Sさんの「社会貢献活動を通して」は刑務所内の作業活動を通じて、身体障害者や震災被害へ役立つことを学んでいる点を評価した。A・Tさんの「人の道」や小さな革命さんの「ひたむき」は、受刑者生活から学んだことを前向きにとらえている。今回も応募作品の多くに、再生への真摯な思いが感じられた。次回も意欲的な作品を期待する。

原田 勇男

― 詩の部 ―

今回は宮城刑務所K・Yさんの詩「消光―死病得て―」に衝撃を受けた。私も24年1月と3〜4月に左右の肺炎に心不全を併発して長期入院したので、身につまされる思いがした。それだけに余命の宣告を受けた患者の心情を思うといたたまれない思いがする。作品は死と対峙しながら、懸命に生きようとしている患者の思いがこもっていて心を打たれた。その闘病生活は壮絶だが、それも生きていくことの証である。

ほかの作品では、自己反省をしながら、前向きに生きようとするK・Aさんの「キンモクセイ」やくろんぼさんの「私の手」に注目した。素朴ながら生き生きとした表現で、再出発への決意がうかがえた。また、命の賛歌を書いた十三郎さんの「たった一つの命だから」、花の賛歌ともいうべきT・Sさんの「花の世界」もさわやかだった。K・Mさんの「三日月の夜」は社会的な主題に注目した。これからも意欲的な作品を期待する。

原田 勇男

— 短歌の部 —

応募者のほとんどが、一人三首を提出しました。意欲の大きさが伝わりました。年に一回の企画ですから、大いに挑戦してほしいと思います。また、来年をめざし頑張りましょう。

〈短歌のタネをたくさん探しましょう〉

毎日が同じことの繰返しのように思うものですが、実は、同じ日は一日もないのです。

朝日は水平線上を毎日移動して昇ってきます。風も昨日の風とは違います。人間も同じで、昨日ではない今日の自分がいます。毎日少しずつ変化しています。その変化こそが短歌のタネです。タネをよく観察し、考え、思いを熟成させて、ぴったりする言葉を探しましょう。私たちは、短歌という美しい花を心に育てているのです。たくさんの美しい花を咲かせましょう。

上林 節江

— 俳句の部 —

百四十一句の応募俳句がありました。一読して、素晴らしい作品が多く、受賞句を選ぶのに途惑いながら、再三読み直してみました。本当に作品に優劣をつけるのが可能なか等とも自問自答しながら、一方読み返す内に、是非選びたい句が浮かんでくるようになりました。選句の基本は季語を活かしきっている俳句かどうかで概ね決定しました。多くの佳作に出合えて感激しています。

さて、私も何度も句会や俳句大会等に作品を応募してきました。入選をしない事も多々ありました。それでも入選しなかった作品にもそれから手を入れて推敲しながら作品を完成させる事もありました。

さらに、選者により選句基準が違うので、自ずと受賞結果も違う事もありますので、一喜一憂せず、選評等を読んで頂き、納得をするかは応募作者が決めて頂きたいと思います。

今回受賞された作品は審査員も作者自身も大切な一句になると思います。又、受賞作品を皆様と読み合って楽しむのも俳句の楽しみ、勉強の一つだと思っています。

今後とも歳時記を片手に俳句を嗜んで下さい。又、今回の寸評の季語は、「秋は初秋、仲秋、晩秋の1か月毎に秋を細分化し、3か月間を三秋」として四季の移ろいを感じてはしく特に明記しました。さらに、季語を身近にして使いこなし、人生を俳句を大切に、素晴らしい作品を応募される事を期待しています。

赤間 学

― 川柳の部 ―

川柳は人間の有り様を五七五の俎板に乗せ、ユーモアや鋭い突っ込みで切り、あっさり盛り付ける庶民文芸です。優等生の作文にならないように、軽く本音を吐くことがコツです。

みちのくの川柳選は今回で二回目です。前回は束縛された環境の中からの作品に息苦しさを感じました。しかし、今回は作者の目先の幅が広くなりました。一句一句の情景がバラエティーに富んでいました。作品が変化したのか、作者が入れ替わったのか、イニシャルだけでは判断できませんが、とてもよい傾向だと思います。

最も驚いたのは、全ての参加者の作品に誤字がほとんど無かったことです。新聞川柳や川柳誌への投句では誤字が付きもので、選者や編集者はいつも悩まされています。各施設でどのような指導がなされているのか分かりませんが、大変すばらしいことです。とてもうれしく感じました。

水戸 一志

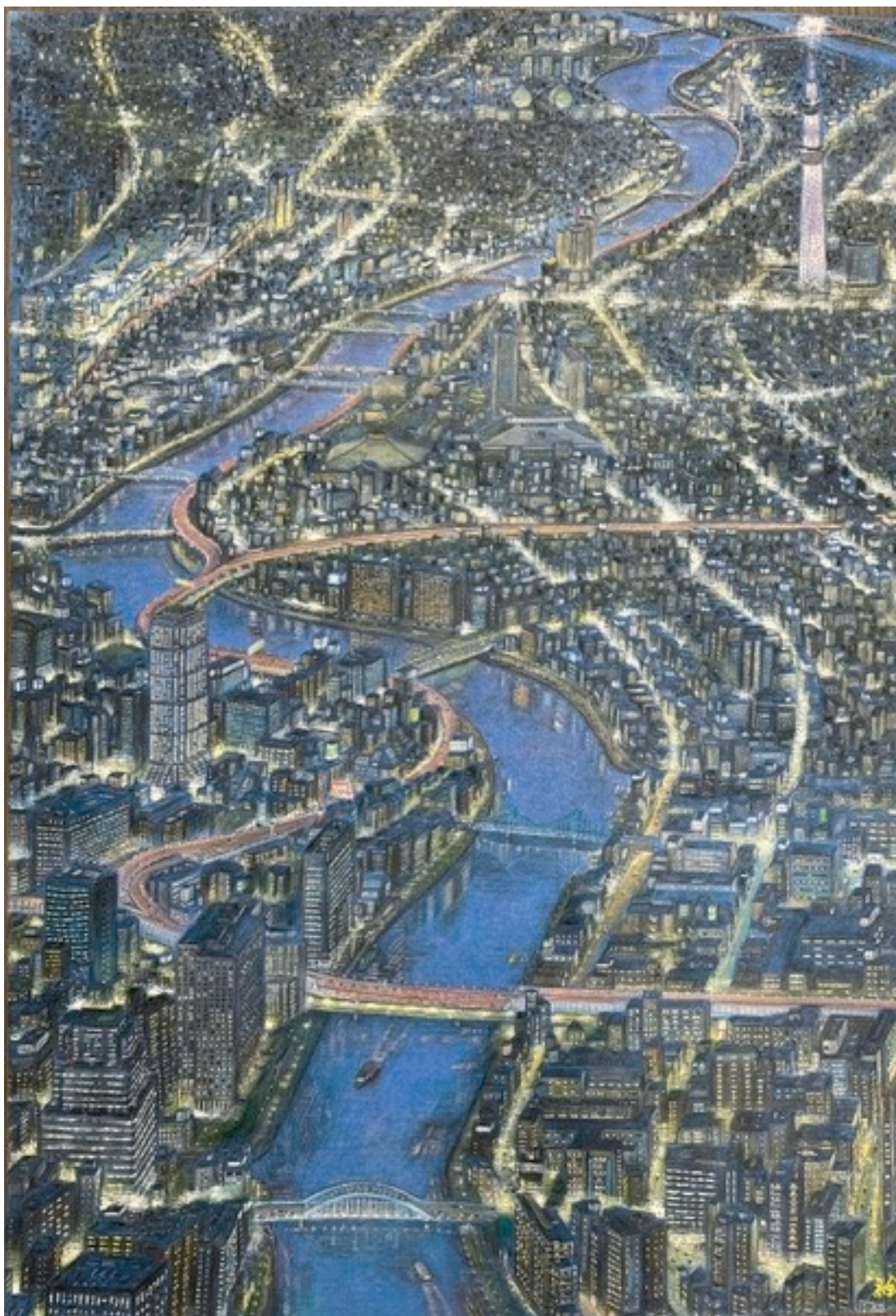


絵 画 の 部

審査員

宮城県芸術協会運営委員

枡澤
怜
先生



東京隅田川周辺の街夜景

山形刑務所 絵夢、M

寸評：夜景の美しさを見事に表現している。ブルーの川が特に美しい。



不朽の名作

福島刑務所 A・T

寸評：不朽の名車をさわやかに表現した。



女子会

山形刑務所 涼月不沈

寸評：女の子の表情、肌の美しさが秀逸



中山道 奈良井宿

宮城刑務所 W・M

寸評：民宿の雰囲気をよく表現している。



今から十数年前のアメリカで起きた貿易センターの同時多発テロの時の絵です

宮城刑務所 M・K

寸評：同時多発テロの恐ろしい絵



和洋折衷

青森刑務所 T・T

寸評：車と鉛筆の質感見事！

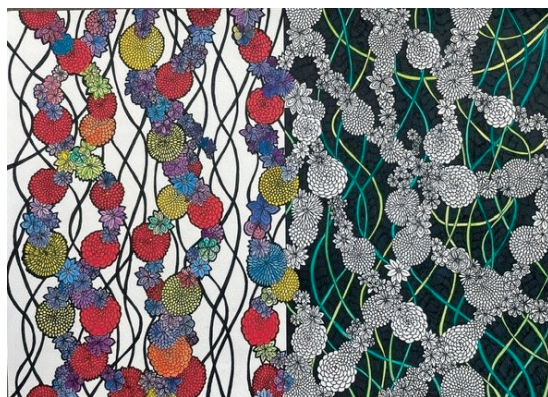




モノクロと極彩色

福島刑務支所 K・A

寸評：二つの色彩のコントラストがうまい。



東墨田川向島三丁目の 夕方の風景

宮城刑務所 M・K

寸評：隅田川と高層ビルのコントラストが
いい。



AM5：00 白駒の池

宮城刑務所 W・T

寸評：舟と棧橋の夕景が実に美しい。



大切な人と過ごすクリスマス

福島刑務支所 E・M

寸評：クリスマスケーキがとてもおいしそう。美しい
プレゼントだ。



王道満開 天へはばたけ曙太郎

福島刑務所 S・K

寸評：曙の表情、色彩が実に美しい。



ポスター・カレンダーの部



審査員

宮城県芸術協会運営委員

鈴木智枝先生



“脱核”世界平和

青森刑務所 兎魂

寸評：画面全体に「脱核世界平和」レタリングの正確さと美しさ。落ちる黒い涙の雨。よく考えられています。



高が点、然れど点、 悔るなかれ、日々の点

福島刑務支所 点々

寸評：全ては点より成り立つことをこんなにも愛らしく表現したカレンダーうれしくなります。



旅気分

宮城刑務所 O・K

寸評：日本中旅気分が味わえます。「旅」のレタリングがんばって。“ペナント...” その文字も手を抜かずにレタリングして下さい。



梅雨の帰り道

山形刑務所 U・S

寸評：丁寧な画面づくりで好感が持てます。カレンダーなので、数字の部分もうひとまわり大きくして良いと思います。

毛筆の部

審査員

東北書道会副会長

鈴木 霽月 先生

龍象之徵無取熊羆之兆誕弥厥月炳然
殊相岐嶷絕於葷茹髭鬣不為童遊道樹
萌牙聳豫章之楨幹禪池畎澮涵巨海之
波濤年甫七歲居然戡俗自誓出
白蘭書



多寶塔碑

宮城刑務所 白蘭

寸評：楷書の基本を修得しており、整正として美しい。

摩訶般若波羅蜜多心經
 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
 蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不
 異色色即是空空即是色受想行識亦復如
 是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
 不增不減是故空中無色無受想行識無眼
 耳鼻舌身意无色聲香味觸法無眼界乃至
 無意識界无无明亦无无明盡乃至無老死
 亦無老死盡无苦集滅道无智亦无得以无
 所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無
 罣礙无罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢
 想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故
 得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜
 多是大神咒是大明咒是无上咒是无等等
 咒能除一切苦真實不虛故說般若波羅蜜
 多咒即說咒曰
 揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提薩婆訶
 般若心經
 香代書



般若心經

福島刑務支所 N・K

寸評：一字、一字に心を込めて丁寧に書いている。



螢飛夜堂静

宮城刑務所 舞吾

寸評：力強く、躍動感がある。



史記一項羽本紀一

青森刑務所 兎魂

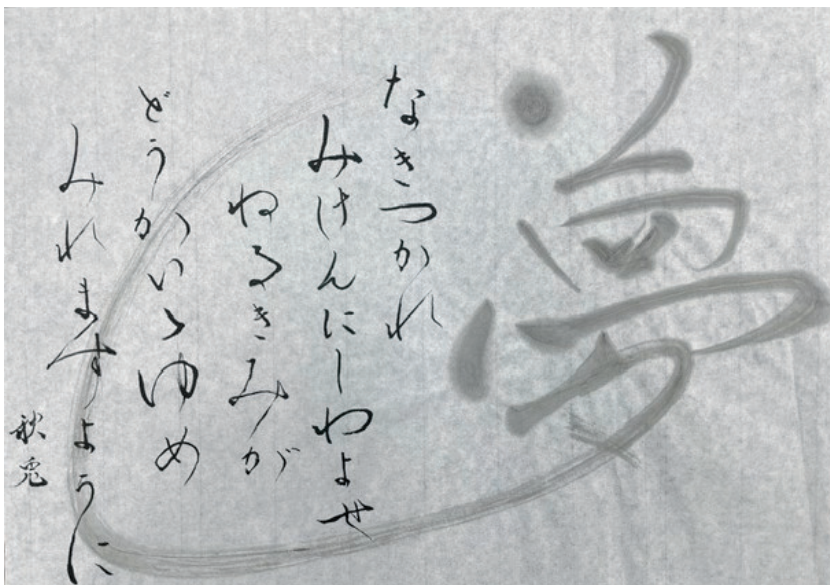
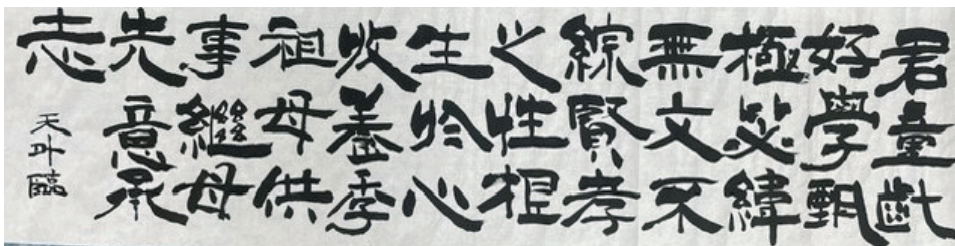
寸評：ゆったりとして、趣きのある文字造形の作品。



曹全碑

福島刑務所 天外

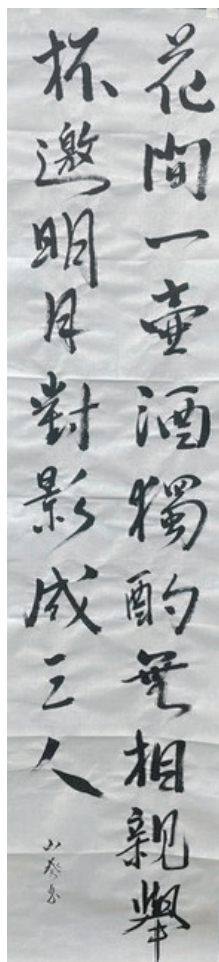
寸評：力強く、大胆な筆致で表現している。



夢を願う

山形刑務所 秋兎

寸評：青墨で書かれた「夢」と平がなの調和が面白い。



曹全碑

宮城刑務所 秋月

寸評：隸書の基本に忠実で丁寧に書作している。



李白「月下独酌」

山形刑務所 山葵

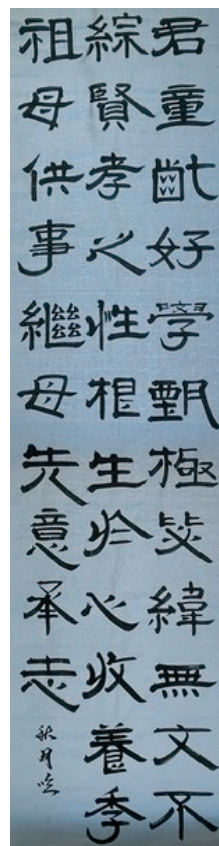
寸評：運筆が大胆で端々とまとめ上げた作。



謳歌暦数帰

宮城刑務所 雅風

寸評：力強い筆線の隸書体で見る者を圧倒する。



義領群雄

宮城刑務所 林夕

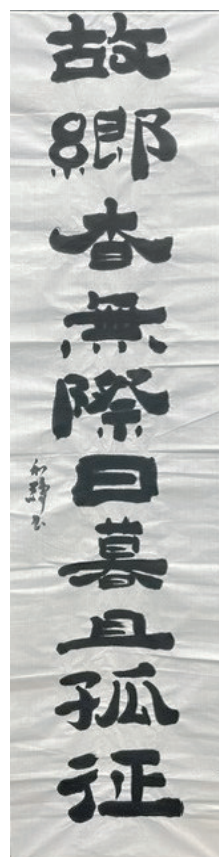
寸評：力強い筆致で勢いがある。



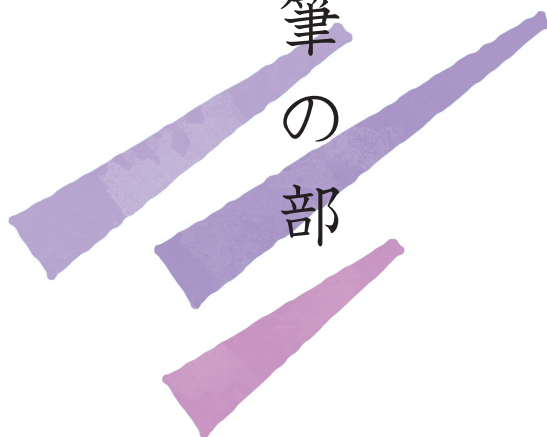
「晩次楽郷県」の一部

宮城刑務所 和鵬

寸評：ゆったりとした書線で文字造形も面白い。



硬 筆 の 部



審査員

東北書道会副会長

鈴木 霽月 先生

懺悔文

我昔所造諸惡業
皆由無始貪瞋癡
從身口意之所生
一切我今皆懺悔



懺悔文

青森刑務所 K・N

寸評：文字の造詣が素晴らしい。転折をしっかり表現している。

徳川家康公遺訓

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし急ぐべからず、不自由を常と思えばさして不足はないもの、こころに望みがおこらば困窮した時を思い出すべし。



徳川家康公遺訓

盛岡少年刑務所 N・M

寸評：文字の配置も良く全体の構成もまとまっている。

欽州守歳

故き歳は今宵尽き
新しき年は明日来たる
愁心は斗柄に随い
東北に春の回るを望む



欽州守歳

秋田刑務所 K・K

寸評：一字一字丁寧に思いを込めて書いている。

日々是大切

獄で十五年の歳月が流れた
残る刑期も十五年である
過ぎれば十五年は一瞬だった
残りの十五年も一瞬だろう
残りの日々を大切に過ぎよう



日々是大切

山形刑務所 四種

寸評：作者の心境が切々と伝わる。

うそ

うそはいわない
ひとにはこびない
ひとのかげぐちは
いわぬ
わたしにできぬ
ことばかり



うそ

福島刑務支所 T・M

命の儚さを知り

徒らに秋の葉の風を待
つ命を待んで、空しく朝
露の日を催す形を養う。
私はそんな心を、今から
でも育み作り上げて行きたい。



命の儚さを知り

宮城刑務所 M・D

寸評：平がなの基本に忠実に丁寧に書いている。

寸評：一線、一線に心を込めて、慎重に書いている。

書画部門審査総評

― 絵画の部 ―

受賞作品は年々レベルアップしているのがすばらしい。今年は、緻密な作品が多く見られ、作者と指導に当たられた先生方にも敬意を表します。楽しく見させて頂きました。

枡澤 怜

― ポスター・カレンダーの部 ―

よくできた作品が多く選ぶのに迷いました。どの作品も今の時代を感じさせるものですし、時間をかけ作り上げていることが分かり感心しました。ポスターの場合、標語があつたら良いと思う作品がありました。

鈴木 智枝

― 毛筆の部 ―

昨年にも増して半切の大きさの作品が多くなった。作品一つ一つに書者の個性があふれており、質の高い出品作品が多かった。

鈴木 霽月

― 硬筆の部 ―

出品された作品から、一人、一人の現在の心情が伝わってきて心を打たれました。

鈴木 霽月

編集後記

本年度も、みちのく書画文芸コンクールとして書画作品及び文芸作品の応募を募りましたところ、各施設からこれまでと変わりなく多数の作品が寄せられ、本書画文芸作品集の発刊の運びとなりました。

文芸作品については、御審査を賜りました先生方の多大なる御協力のもと、各分野において金賞、銀賞、銅賞及び佳作作品を選定することが叶いました。

紙面の都合上、一部しか掲載することができないことが残念です。

末筆になりましたが、本誌の刊行に当たり、御審査と御指導を賜りました先生方に、誌上を借りまして厚く御礼申し上げます。

仙台矯正管区

「みちのく」成人編第45号
令和7年3月発行

編集発行 仙台矯正管区第三部
〒984-0825 仙台市若林区古城3-23-1
TEL 022-286-0178



仙台矯正管区

過去の作品はこちらから
御覧いただけます→

仙台矯正管区



仙台矯正管区フロントページ

https://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00002.html